

問題解決基盤型学習 (PBL) を用いたチュートリアル教育 —老年看護学領域での高齢者理解への学習評価—

新潟医療福祉大学 看護学科

梨本光枝、恩地裕美子、近藤浩子、木部美知子

1 目的

PBLチュートリアル教育は、看護学科では1年次から4年次まで一貫した取り組みをしている。その成果は、問題解決のための課題探求力、関連領域への関心・興味が高まったことなどが報告されている。学年進行に従い、3年次では老年看護学の演習で在宅高齢者のケアマネジメントの課題をPBLを用いて実施した。現時点における看護大学生の老年看護学領域のPBLを用いたチュートリアル教育に関する研究報告は少なく、学習効果を検証する評価指標も少ない。それゆえ、老年看護学におけるケアマネジメント演習は、看護実践者となる看護大学生の高齢者理解の学習評価として重要であると考えられる。老年看護学領域におけるPBL課題に対して学習態度評価表から学習効果を検証する。さらに、質問紙調査を実施し、老年看護学への学習への意欲、高齢者理解への変化について明らかにする。

2 研究方法

- 1) 対象：新潟医療福祉大学看護学科3年生85名
- 2) 実施時期：新潟医療福祉大学看護学科老年看護学演習最終日とした。
- 3) 方法：演習は4週かけて4回実施した。各週ごとに学生個々の態度評価表に自己評価記入を行なった。演習最終日に、質問紙によるアンケート調査を実施した。
- 4) 統計的解析方法：演習事例の展開前後の高齢者に対する印象についての比較は対応のあるWilcoxonの順位和検定を行なった。危険率は5%とした。祖父母との同居の経験の有無と事例展開の目標との関連については単純集計を行なった。また、PBL態度評価表については、G1という変数は、学習課題発見の項目の差を5項目足し合わせた。以下G2は統合的学習、G3は自己学習、G4は対人技能、Totalは差を20項目足し合わせたものとした。単純集計、分布、差の検定、t検定を行なった。統計ソフトはSASシステムを使用した。
- 5) 倫理的配慮
データ収集および分析における個人のプライバシーは確保する。データは統計的に処理をし、個人が特定できないように取り扱う。参加は自由意志であり、不参加によって授業評価等に不利を受けることがないことを明記する。データは本研究以外の目的には使用しない。研究への協力依頼は、書面と口頭で調査目的、倫理的配慮について説明し、研究協力いただける場合の

み質問紙への記入を行ってもらおう。また、この研究にあたり、新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得た。

3 結果

- 1) 質問紙の回収率は91.76%で78名であった。有効回収率は100%であった。
PBL態度評価表は4回とも出席した学生は78名であった。
- 2) 質問紙の高齢者に対する印象については、事例の展開前と展開後では1・「自分の祖父母を想像した」が $P=0.0141$ であった。2・「身近な存在として受け止めた」が、 $P=0.0082$ で1・2ともに有意差が認められた。
- 3) 祖父母との同居の有無では53名(67.95%)の学生であり、現在も同居は31名(58.49%)であった。
- 4) 演習の展開において生活全般の課題を明らかにするという目標1について、72名(92.31%)の学生が達成できたと回答した。目標3の支援サービスを援助に結びつける必要性については、60名(76.92%)の学生が達成できたと回答した。演習で役に立ったことについては、「事例の理解」34名(43.5%)、「グループディスカッション」48名(61.5%)の学生が回答した。
- 5) 態度評価表は表1にあるとおり、G1・G2・G3・Totalの4つの項目において有意差が認められた。

表1：態度評価表の比較

Variable	Mean	Std Dev	Pr > t
G1	1.2948718	2.9722045	0.0002
G2	2.0641026	2.5652004	<.0001
G3	1.3544304	2.9134435	<.0001
G4	0.3291139	3.5795771	0.4163
Total	5.0519481	8.9397046	<.0001

4 考察

事例を用いたケアマネジメント演習で、高齢者の印象について、事例の展開前と展開後の比較では、「自分の祖父母を想像した」「身近な存在として受け止めた」の2点に有意差を認めた。このことは、高齢者理解への学習評価として重要な示唆を得たものと考えられる。また、演習目標1の生活課題を明らかにすることについての達成度が92.31%であったことから、今回の課題事例は問題解決プロセスを包含した因子を持っているものと考えられる。また演習における学生の自己評価では、1週目と4週目では、明らかにG1(学習課題発見)、G2(統合的学習)、G3(自己学習)において有意差を認めた。このことは、老年看護学への学習意欲が回を追うごとに高まったものと考えられる。G4(対人技能)においては、有意差は認められなかったが、演習ではグループディスカッションと事例の理解が役に立ったと回答したことと、Totalでも有意差が認められたことで、学習効果として成果があったものと考えられる。今後は、各学習要素と評価得点別の関連についてと3年次後期の実習体験での変化について調査していきたい。